

〔目的〕乳幼児の長ズボンについては、身体寸法より1、2サイズ大きめのものが選択・購入されていること、さらに、大きめサイズのズボンを着用させることは、子供の動作に不都合があり、危険ですらあることを親が認識していることを、筆者らは先に報告した。本研究では、幼児が大きめサイズの長ズボンを着用した時の動作に及ぼす影響について実験的に明らかにすることを試みた。また、幼児を被験者とする着用実験の方法及び解析方法についても検討した。

〔方法〕被験者は4歳児3名とし、被験者に最も適したサイズと、それよりも大きめサイズのズボンと、より裸体に近い着衣としてスパッツを試験着とした。実験は小規模の運動会形式を想定し、種々の遊びを連続的に行わせ、その中から20m走、靴の着脱、階段昇降の3動作を中心にビデオ撮影による観察と画像解析による測定を行い、3試験着間の動作の比較を行った。

〔結果〕①着用実験として遊びの要素を取り入れ、連続した動作の中で、衣服の動作への適応性を把握することは、被験者に実験としての緊張感や違和感を与えず、幼児の動作の実態と一致した結果が得られ有効であった。②大きめサイズでは、走る動作において、前屈みの姿勢をとったり、膝が外向きになったり、腿が上がらないなどの現象が観察された。靴の着脱では、裾が靴の中に入り時間がかかった。階段昇降では、膝をついて上り、降りるときは飛び降りるなど重心の移動に時間がかかることが確認された。③概して、大きめサイズを着用して動作を繰り返すと着崩れの程度が大きく、危険性が高いことが明らかとなり、特に股上や腰部におけるずり落ちが幼児の動作性を妨げていると考えられた。